

6-1 やきもの研究所

6年生の社会科での歴史の学習の中で、縄文時代の人々が土を掘り出して自らの手で一から土器を作っていたことなどを知り、子どもたちは「土器」に興味をもちました。そこで信楽粘土で土器を作る体験を行ったところ、自分の手で自由自在に形が変化する粘土のおもしろさや、形を作ることの難しさを感じたようでした。またやきものについて詳しく調べていくと、日本には実に多様な種類のきものがあることや、横浜焼なるものがあったことに驚きを隠せない様子でした。「地元の土でやきものができたら面白い。」「粘土探しも、形を作ることも、とても難しそうだ。だからこそ、大きな成長と達成感を得られるのではないか。」という思いから、子どもたちは「世界に一つだけの、オリジナルの“大岡焼”を作りたい。」という願いをもちました。



まずは粘土探しです。ボーリング資料を使って粘土層を探すと、なんと学校の地下に粘土が眠っていることがわかりました。地図を広げ、場所を特定し、1mの大穴を夢中で掘り続ける子どもたち。「色が違う土がでてきた！」さながら宝さがしのような様子でした。また弘明寺公園など、地域にあるガケを探しては、粘り気のある土を見つけてきました。問題は、「この土はやきものに使えるのか」どうか。テストピースを作り、可塑性・耐火性・収縮率を確かめます。子どもたちが見つけてきた8種類の土のうち、その3つの条件をクリアしたのは、3種類でした。

その土を使って、コップ、キャンドルホルダー、めがね置き、コースター等、子どもたちは思い思いに自分の作りたいものを作りました。きれいなレンガ色の大岡焼第一号を見て、大歓声があがりました。

